昭和46年1月1日発行（毎月1回1日発行）第20巻・第1号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー

WIDE COLOUR

海軍艦上爆撃機

彗　星



☆特集☆

'71 1

米空母アメリカの艦載機

艦橋より艦首に並んだ艦載機を見る。手前よりVA-146とVA-147所属のA-7, VA-165所属のA-6A, VF-96, 92, 所属のF-4Jなどが見える。





第92戦闘飛行隊所属のF-4JファントムII。第165戦闘飛行隊所属のA-6Cイントルーダー。A-6のC型は日本に初お目見え（下）





空母"オリスカニ"(CVA-34)の艦載機 上:第155攻撃飛行隊所属のA-7Bコルセア 下:第63写真偵察飛行隊所属のRF-8Gクルセイダー





MiG-21とMiG-17戦闘機

1969年12月22日の北ベトナム民主共和国創立25周年記念日に，ハノイ郊外に展示された機体で，機首の赤い星は米軍機撃墜マーク数を表す．



㊤MiG-17とSA-2地対空ミサイル。㊦出動準備中のMiG-17戦闘機。





写真上下：P-51Cムスタング戦闘機　米国イリノイ大学飛行場にて。同大学の教材用として払い下げられた機体。（1945年に撮影）





P-47Dサンダーボルト戦闘機

1949年にカートランド空軍基地で撮影したカラー写真で，テネシー州航空隊所属機。大変に珍らしい塗装の機体。



三菱局地戦闘機 "雷電"

アメリカのオンタリオ航空博物館で野外に展示された"雷電"局地戦闘機。今年の初めに復元し，塗装も新しく塗り上げたもの。（69年12月7日撮影）

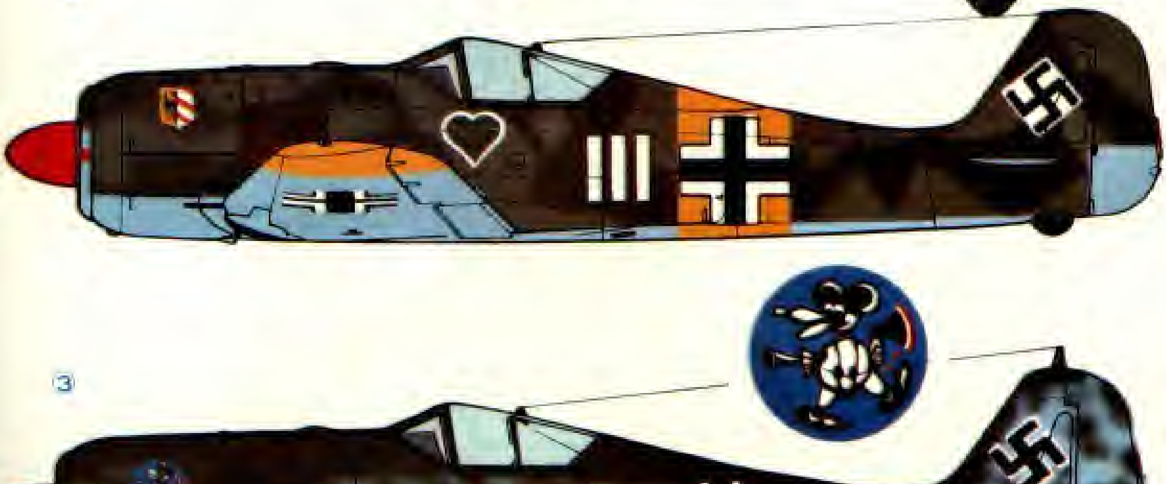
① 平面塗装図
② 第54戦闘連隊第Ⅰ大隊所属機
③ 直援第Ⅰ連隊所属機
④ 第Ⅰ戦闘連隊第2大隊ハインツ・ベアル少佐機

① PLAIN FIGURE.
② I / JG. 54.
③ SCH. G. 1
④ II / JG. 1, FLOWN BY MAJOR HEINZ BAR.



①

②



③



④



フォッケウルフ Fw190A

FOCKE WOLFE Fw190A

好敵手スピットファイアとともに，最後まで改良競争にしのぎをけずったドイツの傑作戦闘機 Fw190は，ドイツ的で荒けずりな，独特の構成美をもつ機体で，1939年6月に原型機Fw190V1の初飛行以来，トラブルもなく各改良型を生み，実戦部隊へ配属された

Fw190はV-1－5など一連の試作機についてAシリーズ，B，試作のC型につづいて「長っ鼻」と呼ばれるDシリーズに発展，このD型は最大速度700km/h近くの快速を誇った。更にF型G型があり，Fw190系の最終型は名称変更したTa152のシリーズがあり，各型合計約20,000機が生産された。

☆キットについて☆

Fw190A-3のキットはレベル1：72シリーズで発売されていて，モデルの全幅14.3cm，全長12.4cmという手ごろな大きさに仕上る。

ミニ・プレーンではあるがFw190の特徴はよく出したモデルで，手を入れると素晴しい仕上りを示す。

☆塗装について☆

図①は平面の塗装例で，翼上面はダークグリーン⑰とブラックグリーン⑱のスプリンター・タイプ迷彩。

図② Fw190A-4/u8 戦闘第54連隊第1大隊の所属機で，ロシア戦線で使用された機体，機体の上・側面はブラックグリーン⑱とダークグリーン⑰の特殊迷彩で，下面はライトブルー⑳，主翼翼端は下面だけイエロー④。

図③ Fw190G 直援第1連隊の所属機で，機体の背と翼上面はダークグリーンとブラックグリーンのスプリンター・タイプ迷彩。胴体側面と下面はライトブルーで，胴体側面にRLMグレーのはん点迷彩がある。翼端下面と機首下面はイエロー。

図④ 220機の撃墜記録をもつ，戦闘第1連隊第2大隊のエース，ハインツ・ベア少佐機。胴体と機体下面がライトグレー，胴体にグレー75のはん点迷彩があり，胴体の背はグレー75，翼上面はダークグレー74とグレー75のスプリンター・タイプ迷彩。

RLMグレー（ドイツ空軍グレー）はグレー75に少量のダークグリーン㉓とホワイトを混色した灰色のまざったウグイス色。ライトグレーは，グレー75㊲へホワイトとライトブルー⑳を混色して白っぽくすると近い色になる。

(K. Hashimoto)

Fw190A-8 データ (Fw190A-8 technical data)

乗員1名(crew 1)。諸元(dimensions)：全幅(span) 10.5m，全長(length) 8.84m，全高(height) 3.96m，全備重量(gross weight) 4,420kg，発動機(power plant)：BMW801D-2 (2,100 HP)×1基，最大速度(max. speed) 660km/h，実用上昇限度(sevice ceiling) 11,400m，航続距離(range) 800km，武装(armament) 13mm×2，20mm×4.

The FW-190 was the mainstay of all German fighters during WWII. As was the case with the British Spitfire, improvements were made in this aircraft over and over again since its first flight in June 1939, making it a rustic but structurally unique aircraft. After a series of test aircraft, V-1 through V-5, the FW-190 was mass-produced in the A, B, C and D models. The D series aircraft, called "Long Noses", could reach a speed of 700 km an hour. The aircraft continued to be improved in the F and G models and finally developed into the Ta-152 models. A total of nearly 20,000 planes were produced.

KIT:

The FW-190A-3 is included in the Revell 1/72 series. Though it is a small model kit (14.3 cm wide and 12.4 cm long), the details of the FW-190 are carefully depicted.

PAINTING:

Shown in Fig. 1 is a typical painting scheme. The upper wing surfaces have a splinter type camouflage of Revell Color (RC) 17, dark green, and RC-18 black green.

Fig. 2. This is the FW-190A-4/US of the 1st Group, 54th Wing, on the Russian front. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-18 black-green and RC-17 dark green. The lower surfaces are RC-20 light blue. The lower wing tips are yellow.

Fig. 3. This FW-190G belongs to the 1st Wing. The back of the fuselage and upper wing surfaces are splinter camouflaged with dark green and black-green. The sides and lower surfaces of the fuselage are light blue. The sides of the fuselage are dot camouflaged with RLM gray. The lower wing tips and the lower part of the nose are yellow.

Fig. 4. This is the aircraft used by Maj HEINZ BÄR, ace of the 2nd Group, 1st Fighter Wing, who shot down 220 aircraft. The fuselage is painted in varying tones of gray, with an RC-75 gray dot camouflage. The back of the fuselage is RC-75 gray. The upper surfaces of the wings are splinter camouflaged with RC-74 dark gray and RC-75 gray.

NOTE:

RLM gray (German Air Force gray) is a gray-green brown, and can be made by mixing RC-75 gray with a small amount of RC-23 dark green and white. Light gray can be made by mixing RC-37, 75 gray with white and RC-20 light blue.

(K. Hashimoto)

Fw190の塗装に必要なレベルカラー	
①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑰ダークグリーン
⑱ブラックグリーン	⑳ライトブルー
㉓ダークグリーン	㉚フラットベース
㉝黒つや消し	㉞スカイブルー
㊱グレー74	㊲グレー75



フォッケウルフ Fw190G-1。 1943年からドイツの戦闘爆撃機の主力となった機体で，アフリカや西部戦線，東部戦線などで劣勢なドイツ地上軍を助けて活躍した。写真の機体は連合軍側にろ獲された1機で，主翼下にDNFPのレターが画かれている。



フォッケウルフ　Fw190

英国のビギン・ヒル博物館に展示されているFw190で，FかGシリーズの機体と思われる。塗装は英国に持ち込んでから塗られたもので，オリジナルとは多少ことなっているようである。(1967年9月6日撮影)

HAWKER *HURRICANE MK.II* Revell

① 図②の平面塗装
② イギリス第6飛行中隊所属機
③ イギリス第151飛行大隊所属機
④ イラン空軍飛行学校所属機

① PLAIN FIGURE OF ② AIRCRAFT.
② NO. 6 SQUADRON, R. A. F.
③ NO. 151 SQUADRON, R. A. F.
④ IRANIAN A. F. FLYING SCHOOL.



②



③



④



©K.Hashimoto

ホーカー・ハリケーン Mk. 2

HAWKER HURRICANE Mk. 2

第２次大戦中，イギリスの代表的戦闘機として，スピットファイアとともに英本土防空戦をたたかいぬいた有名機で，原型機は1935年に完成，イギリス空軍初の近代型戦闘機となり，主な型としてMk. 1, 2, 4, 5, などの各型が合計12,780機生産された。ほかにカナダでも約1,451機が生産されて10－11－12－12Aなどと呼ばれる各型がつくられている。

☆キット紹介☆

レベル1/72シリーズのハリケーンは2B型で，ミニ・キットではあるがハリケーンの特徴である羽布張りの表現も精巧そのものだし，実機のイメージをうまく出している。小さいモデルなので改造も案外簡単に可能であるから，図のように熱帯地用の大きい空気取入口をつけてみるなどと，各型のバリエーションを楽しむ手がるなキットである。

☆塗装について☆

図①と②はイギリス第６飛行中隊のハリケーン 2Dで機体の上・側面がミドルストーン㉑とダークアース㉒の迷彩，下面はアズール・ブルー（ライトブルー⑳＋スカイブルー㉞＋レッド少量），胴体の字は白と赤。

図③　第151飛行大隊所属のハリケーン 2Bでロシア戦線で使用された機体。機体の上・側面はダークグリーン㉓とダークシーグレー㉕の迷彩で，下面はミディアム・シーグレー(㉕＋ホワイト)，スピナーはホワイトとなっている。

図④　イラン空軍飛行学校所属のハリケーン2Cで，機体の上・側面はダークアース㉒とミドルストーン㉑の迷彩，機体の下面はアズール・ブルー，国籍マークはエメラルドグリーンと白・赤，尾部の文字は黒。

（K. Hashimoto）

ハリケーン2C データ（HURRICANE Mk. IIC technical data）

乗員１名（crew 1）。諸元（dimensions）；全幅（span）12.2m，全長（length）9.45m，全高（height）4.0m，全備重量（gross weight）3,530kg，発動機（power plant）；ロールス・ロイス・マリーン20（ROLLS-ROYCE MERLINE ＸＸ）［1,185 HP］×１基，最大速度（max. speed）546km/h.，実用上昇限度（sevice ceiling）9,000m，航続距離（range）740～1,480km．武装（armament）20mm×4，爆弾（bomb）120－225kg×2．

The Hawker Hurricane is a representative British fighter during WWII. Together with the Spitfire, this aircraft successfully carried out the air defense of the British mainland. Its first model was completed in 1935, and became the first modern fighter of the British Air Force. A total of 12,780 aircraft of various types including the MK-1, 2, 4 and 5 types were produced. In addition, a total of 1,451 aircraft of various types including the 10, 11, 12 and 12A types were produced in Canada.

KIT:

The Hurricane in the Revell 1/72 series is the 2B type. Though it is very small, its detail is especially elaborate and expresses skillfully the design of the actual Hurricane. Model fans can enjoy making many variations because it is so small. The one pictured, for instance, has a big air intake for use in the tropics.

PAINTING:

Shown in Figures 1 and 2, is the 2D model of the British 6th Wing. The top and sides of the fuselage are camouflaged with Revell Color (RC) 21, middle stone, and RC-22 dark earth. The lower surfaces are azure blue (which is made with RC-20 light blue, RC-34 sky blue and a small amount of red). Lettering on the fuselage is white and red.

Fig. 3. This is the Hurricane 2B of the 151st Flying Group, which was used on the Russian front. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-23 dark green and RC-25 dark sea gray. The lower surfaces are medium sea gray (RC-25 dark sea gray plus white). The propeller is white.

Fig. 4. This 2C model belonged to an Iranian Air Force school. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-22 dark earth and RC-21 middle stone. The lower surfaces are azure blue. The insignia is emerald green, white and red. Markings on the tail are black.

(K. Hashimoto)

ハリケーンの塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑥グリーン
⑳ライトブルー	㉑ミドルストーン
㉒ダークアース	㉓ダークグリーン
㉕ダークシーグレー	㊿フラットベース
㉝黒つや消し	㉞スカイブルー



ホーカー・ハリケーンMK. I　1940年３月，緊急発進でいっせいに愛機に駆け寄る第87中隊のパイロットたち。機体上面をダークアースに塗り，尾翼に白い矢印のマークを付けたハリケーンのなかには，木製２翅の固定ピッチ・プロペラを金属製の３翅可変ピッチに替えた機体もまじっている。



ホーカー・ハリケーン

英国のヒギン・ヒル博物館に保管されているホーカー・ハリケーンMK.2。飛行可能な状態に整備された，塗装も新しく塗られている。



来日した米空母オリスカニ

先月号の"アメリカ"につづいて、今回は去る10月末横須賀に寄航した米第7艦隊の攻撃空母CVA-34"オリスカニ"の搭載機を紹介することにしよう。これは10月25日の"ネービイ・デイ"に一般に公開されたときのスナップである。〔上〕クルーセイダーの偵察型RF-8Gで、第63軽偵察飛行隊（VFP-63）の所属機。〔下〕第191戦闘飛行隊所属のF-8J。

USS ORISKANY LIES MOORED AT YOKOSUKA PORT.







今回“オリスカニ”に積まれて来日したのは第19空母航空団のF-8Jを装備した第191戦闘飛行隊（VF-191）と第194戦闘飛行隊（VF-194）、A-7Aの第153攻撃飛行隊（VA-153）とA-7Bの第155攻撃飛行隊（VA-155）、それに第63軽偵察飛行隊（VFP-63）のRF-8G、第6分遣隊のUH-2Cヘリコプタなどである。

〔上〕第153攻撃飛行隊のA-7AコルセアII。〔左〕第194戦闘飛行隊のF-8Jクルーセイダー。

〔下〕甲板に艦戦、艦攻がいっぱいの“オリスカニ”。







東南アジア方面の海域で作戦していた"オリスカニ"は、整備補給のために立ち寄ったもので、公開中も、ひっきりなしに訪れる観客のあいまをぬって飛行甲板の補修作業が進められていた。激しい"出撃"のあとをとどめて各機とも塗装が一様によごれており、新しく塗りかえ中の機体も多かった。

上 第155攻撃飛行隊のA-7BコルセアII。右・下 第6分遣隊のカマンUH-2Cシースプライト。シースプライトのC型は、T58-GE-8Bタービン・エンジンの双発にしたもので、1967年から海軍に装備されている。今回は2機が積まれて来日。













左の段は“オリスカニ”搭載機の尾翼マーク。①第191戦闘飛行隊のF-8Jで、赤いダイヤのマーク（この機体は第19空母航空団の司令機）。②第63軽偵察飛行隊のRF-8Gで、2本の紺の線のなかに白星。③155攻撃飛行隊のA-7Bで、マークは白線つきの線。④第153攻撃飛行隊のA-7Aで、ブルーの地に白線のマーク。

〔上〕艦橋に頭をつけるように並んだ第155攻撃飛行隊の2機のA-7B。〔右〕艦首から“オリスカニ”の艦橋を見る。右手に見えるのは前部リフトで、当日は飛行甲板へ昇り降りする観客のために特別サービス。〔下〕第63軽偵察飛行隊のRF-8G。

なお、現在東南アジア方面で作戦中の第7艦隊の攻撃空母は、“ボノムリチャード”、“シャングリラ”、“アメリカ”とこの“オリスカニ”の4艦だが、米国では近くこのうちの1艦を減らして、平時のパトロール態勢にすると発表している。





もてもての　F-4E ファントムII







F-4ファントムは1958年に生産を開始してから昨年の暮までに3,800機近くが量産され、来年までに4,200機を越えるという。米海空軍から英海空軍、イスラエル、韓国空軍につづいてわが航空自衛隊のF-4EJも年内に2機が入ってくる。すでに、西ドイツ空軍でも88機のRF-4Eを発注しており、F-111の不調にごうをにやしたオーストラリア空軍も24機のF-4Eをリースした。最近はスペイン空軍なども ファントムの装備を希望しているといわれ、正に"もてもてのファントム"。すっきりしたF-4Eの写真からその魅力を探っていただくことにしよう。



④





③

機首にM-61A1 20ミリ機関砲を付けたファントムの多用途戦闘爆撃機型F-4Eは、すでに800機近くが造られている。
①②⑤不調のF-111をあきらめてオーストラリア空軍が採用することになったF-4E。すでに24機全機が、カンガルーのマークをつけて納入されている。④西ドイツ空軍のRF-4E。同空軍ではこの偵察型を88機発注しており、その第1号機の納入式が去る10月末、マクダネル・ダグラス社のセントルイス工場で行なわれている。③⑥⑦米空軍のF-4E。③⑦は量産型の1号機で、⑥はE型の原型。RF-4Cの機体に機関砲をつけてテストしたもので、機首がつき出しになっている。



⑥

MCDONNELL

⑦





木更津の第1ヘリコプタ団

陸上自衛隊の第1ヘリコプタ団は、昭和48年3月に、霞ヶ浦にいた第1ヘリコプタ隊と第501ヘリコプタ野整備隊を母体にしてここ木更津で編成された部隊で、装備機はKV-107、H-4、第1ヘリコプタ隊、第2ヘリコプタ隊それに第1ヘリコプタ野整備隊から成る。長官直轄の部隊で、全国の地上部隊を支援するのがその任務。

"空飛ぶ陸上自衛隊"のスローガンのもとに、空中機動力を増強するために新しくつくられた部隊でもある。KV-107は3次防末までに40数機が配備されることになっているが、すでに20数機を装備して連日の訓練のほか、随時の災害にも派遣されて活躍している。





〔トップと左〕第2ヘリコプタ隊のKV-107。離着陸訓練中のもの。ただいま訓練のために、主力は北海道方面に派遣されており、基地はかんさんとしている。

〔上〕第1ヘリコプタ団の木更津駐とん地正門。ここには第1ヘリコプタ団のほかに、第428会計隊、第396基地通信隊、東方管制気象隊第3派遣隊、東方調査隊木更津派遣隊なども駐留している。



1ST HELICOPTER WING AT KISARAZU STATION

(上) 第2ヘリコプタ隊のKV-107。第1ヘリコプタ団の所属機は全面オリーブドラブの塗装。胴体に第1ヘリコプタ隊所属機は白線、第2ヘリコプタ隊は黄色の線を巻いており、各隊とも第1飛行隊はそれが1本、第2飛行隊は2本となっている。上の機体は黄色の線2本で、第2ヘリコプタ隊第2飛行隊の所属機。

(右・下) ヘリコプタ団の連絡用に使っている川崎KH-4ヘリコプタ。H-13を改良にしたもので、陸上自衛隊では、18機使用している。右の写真でKH-4の前に立つのは団司令の大[illegible]将補。









〔上〕着陸するKV-107。第1ヘリコプタ隊第2飛行隊の所属機。〔左と下〕後方から見たKV-107とKH-4。第1ヘリコプタ団は、ただいま着々整備中というところだが、所定の40数機が全機そろえば、地上部隊1コ連隊を2回で空輸できる能力という。



〔下〕エプロンからハンガーとタワーを望む。木更津基地は旧海軍航空隊いらい軍用航空にはゆかりの地。いま第1ヘリコプタ団では、基地内に航空参考資料館をつくる計画もあり、そのための資料を蒐集中である。



フォト ニュース

XC-1初飛行





航空自衛隊の中型輸送機ＸＣ－１の試作１号機は、去る11月12日午前10時01分、日航製の長谷川、沼田両テスト・パイロットの操縦で各務ヶ原飛行場を離陸、11時28分に着陸して、１時間27分にわたる初飛行をぶじ終了した。〔上〕飛行中のＸＣ－１と随伴機のＴ－１Ｂ。〔右〕滑走路に向うＸＣ－１。





（上）このほど完成し
サーブ37ビゲン戦闘機の
原型第1号機。顕然転立
工場からロールアウトし
ところ。スウエーデン空
では、練習型を含めて
機のビゲンを発注してお
1971年早々から納入が開
される。（左）初飛行に
えて地上滑走テスト中の
-1011トライスター1号
10月27日、カリフォルニ
のパームデール工場にて

（右）300個の荷重テスト用フレームをつけたL-1011の構造テスト機。この機で、地上で2万回以上の"飛行"を体験する。（下）10月29日、ツールーズで初飛行したカラベルの最新型12型。スーパー・カラベルより胴体が3.21mも長くなって、座席数は130／140に増え、B737-200に対抗できる旅客機。P＆W JT8D-9ターボファン装備。







〔上〕テスト飛行中のコルベット　ビジネス・ジェット。同機のテスト飛行は7月からつづけられており、実用化は71年早々とみられている。〔右〕このほど初飛行したボーイング747Bの1号機。B型は航続距離と搭載量を向上したもので、現在のところ13の航空会社から42機が発注されている。







〔上〕このほどメキシカーナ航空会社に納入されたボーイング727-200。同機は高温のメキシコでの離陸性能を向上させるためにＪＡＴＯ（離陸補助ロケット）を装備している。〔下〕ＲＲブリストルの新エンジン　バイパー600を装備したＨＳ．125飛行テストベッド機。同エンジンは、ＨＳ．125-600のほか、マッキＭＢ．326K練習機にも採用が決っている。〔左〕去る11月３日、駿河湾で行なわれた海上自衛隊の観艦式でのスナップ。上は受閲機のＵＦ-２"かりがね"、下は観閲艦の１番"みねぐも"の上を飛ぶＨＳＳ-１。





（本文93ページ参照）

北ベトナムの空を護るもの













米軍がつぎ込む新鋭機を相手に、一歩もひかずに対戦した北ベトナムの防空部隊。これがその陣容である。

一頁の写真は、1昨年(19[illegible]年)の12月22日、北ベトナム民主共和国の創立25周年を祝って、ハノイ郊外に展示されたときのもので、MiG-17、MiG-21の迎撃戦闘機と対空ミサイルSA-2（ガイドライン）。

左ページ上と下は展示場のSA-2とMiG機。SA-2とMiG-17は迷彩色に塗られ、MiG-21は銀塗装。中の写真はデモ飛行中のMiG-21(左)とMiG-17。

このページ2枚はMiG-17部隊のパイロットたち。まるでレシプロ機の乗員のように簡単な服装である。



スナップだより



〔上〕長いあいだ岐阜基地に保管されていたバンパイア・トレーナーが、航空自衛隊の浜松南基地に展示されることになり、10月30日、組み立てを終った。〔下〕同じく同基地の展示機としてイタリアから寄贈されたアンサルドS.V.A.9長距離機。これは大正9年、ローマ～東京間の飛行に成功した機体のレプリカで、大阪万博で展示されたもの（2枚とも浜松市・奥田博）。





〔左〕東北学院大学航空部が昨年3月に購入した西独グラスフリーゲル式スタンダード・リベレ。日本初のオール・グラスファイバー製高級・単座グライダーで、霞ノ目飛行場を基地として飛びまわっている（仙台市・菅原薫）。

大阪国際空港を訪れたカナダ国防軍のCL-44（CC-106）。万博関係で飛来したものと思われる。10月29日撮影（豊中市・山根伸一郎）。



未発表 海軍機写真集

WINGS OF JAPANESE NAVY



零戦21型（A6M2）、第3航空隊所属機



魚雷を抱いた97式1号艦攻の原型10試艦上攻撃機（B5N1）



編隊で爆撃中の96式陸上攻撃機11型（G3M1）。胴体上部の引込式銃塔と胴体下部の垂下式銃塔を全部出しているめずらしい写真。



[illegible]二式飛行艇12型 (H8K2)。ドリーに載せられているのは250kg爆弾で、これを両翼下に8発懸吊できた。



(本文記事参照)



日本海軍最後の艦爆"彗星"

〔上〕２式艦上偵察機（Ｄ４Ｙ１-Ｃ）として採用された"彗星"の試作型。写真の機体は初期の２式艦偵で、艦偵型は風防の前の眼鏡式照準器がないのが外観上の識別点である。

〔下〕液冷のアツタ32型（離昇出力1400HP）エンジンを装備した"彗星"12型（Ｄ４Ｙ２）。この機体では、眼鏡式照準器がはずされている。





〔上・右〕出撃する"彗星"12型。
"彗星"は昭和18年6月に最初の部隊が編成されて以来、エンジン不調というハンデを負いながら、旧式化した99艦爆に代って海軍艦爆隊の主力



［下］不調のアッタエンジンにかえて空冷の金星エンジンを装備した"彗星"33型（D4Y3）。写真の機体は横須賀航空隊の所属機。写真は静浜基地で戦後撮影したもの





(上) 金星エンジンを装備した"彗星"33型のラインアップ。本機が第一線に参加したのは昭和19年の秋頃。すでに空母はなく、ほとんど陸爆として使われた。写真の機体は大分の第701航空隊所属機。



鹵獲された日本の軍用機

〔上・下〕ニューギニア西方のニューブリテン島のホスキンズ飛行場に置き去りにされた艦爆彗星21型。機首部は比較的痛みが少ないが、胴体中央部から後方にかけては、直撃弾でも受けたのか、ボロボロの状態。1944年5月12日の撮影。





〔上〕グアム島のアロタ飛行場で捕われた海軍機。左は零戦21型で、中と右は月光の初期と後期の型。〔下〕同じくアロタ飛行場の99艦爆22型の残骸。2枚とも1944年8月2日の撮影。





〔下〕ニューギニアのビアク島のモクマー飛行場の片隅に集められた海軍機の残骸。3機の零戦と1式陸攻の尾部がどうにかかたちをとどめている。1944年6月19日の撮影。





サイパン島で鹵獲された97艦攻11型の操縦席。計器板の計器の配置がよくわかる写真。1944年1月の撮影。

海兵隊のコルセア



(USMC Photo)

〔上〕沖縄方面の作戦に参加するために硫黄島に集結した米海兵隊第21航空大隊のＦＧ-１Ｄコルセア。機首側面に大きく機体番号（手前から２機目はなし）を書いている。機体全面つや消しのシーブルーの一塗装。後方にＢ-29、Ｐ-51やＰＢ４Ｙなどが見える。1945年４月18日の撮影。

〔右〕これは海兵隊第312戦闘中隊（ＶＭＦ-312）のＦ４Ｕ-１Ｄで、全面をつや出しのシーブルーに塗り、機首と垂直尾翼に赤と白のチェッカーを付けている。この中隊はのちにＶＭＡ-312となり、朝鮮戦争時にもＦ４Ｕ-４の機首に赤と白のチェッカーを付けて出撃している。写真は1945年４月、沖縄にて。

〔下〕海兵隊第２航空連隊のＦ４Ｕ-１Ｄ。全面つや消しのシーブルーの塗装。機首カウリングに白帯を巻き、垂直尾翼にも白い三角のマークを付けている。1944年10月17日、ペルリュー島にて。







〔上〕海兵隊第4航空連隊のF4U-1D。1944年6月、マーシャル島上空を飛行中のもので、全面つや消しのシーブルーの塗装，機体番号はごらんのような位置に白く画いている。
〔下〕海兵隊第22航空大隊のFG-1D。終戦の頃、沖縄から九州方面に進攻したコルセアで，全面つや出しのシーブルーの塗装、主翼に白帯を巻いている。写真は終戦の翌月，1945年9月，沖縄にて。



最初のモスクワ～東京親善飛行



昨年8月、東京—モスクワ間はシベリア経由路線で結ばれて10時間余の距離となったが、これは46年前の1925年（大正14年）に、2カ月余かかってモスクワから東京へ飛来した初の日ソ親善飛行のお話し。

使用機はデハビランド9型をソ連でライセンス生産したR-1偵察機。R-1は6機の編隊をつらねて1925年6月10日、モスクワの飛行場を離陸した。6月24日、全機イルクーツク着。つづく北京への飛行では1機が故障で不時着したが、7月17日には5機が北京飛行場に勢ぞろい。8月20日、このうちの2機が北京—奉天—大邱—広島を通って東京へのコースに向った。ボルコボイノフの乗り込んだ1機は濃霧のために下関付近に不時着。しかしグロモフが操縦する1機は9月1日、東京所沢飛行場に着陸した。写真上は東京までの飛行に参加した操縦士と機関士たち。左から二人目がM．M．グロモフ。写真右は東京の宿舎でくつろぐ乗員たち。



北京飛行場のR-1機。このうち2機が東京を訪問



日本の"桜花"もある

ロンドンの科学博物館



一般に"科学博物館"と呼ばれるロンドンの"ミュージァム・オブ・サイエンス・アンド・インダストリー"については、日本の飛行機通のあいだでもあまり知られていない。しかしここには、日本の"桜花"をはじめ、スピットファイア、Me163日、V-1、グロスターE. 28／29、スーパー・マリンS. 6、ビッカース・ビミイといった2次大戦前後までの名機がぎっしりと詰めこまれている。





〔トップ〕"科学博物館"の館にも目につく場所に、日本の"桜花"11型特攻機が完全な姿で展示されている。全体が薄いグリーンに塗られ、機首の横に桜のマークがある。

〔上〕"桜花"の角張った短い主翼。羽布張りのエルロンにはバランス・ウエイトが張り出している。左に見える機体はグロスターのジェット研究機。

〔左〕尾部には3本のロケット・ノズルが突き出ている。特徴ある双尾翼もそのまま。

（本文記事参照）





〔上〕S. E. 5 a 戦闘機。第1次大戦のイギリスの戦闘機を代表する存在。200HPの水冷エンジンを付けて、240km/hrの最速を得った。

〔左〕デハビランド・モス。1920年から30年代にかけてイギリスの軽飛行機界をリードした機体で、練習用に軍民で広く用いられた。



〔右〕スーパーマリンS. 6B水上機。第2次大戦前の1931年にシュナイダー杯レースに優勝した有名な機体で、この経験がスピットファイア戦闘機に生かされた。胴体とフロートの下面は黒、上面は白。





〔上〕グロスターE．28／39ジェット研究機。ジェットエンジンをはじめて付けたイギリス最初のジェット機。第2次大戦前に極秘に飛行した。

〔左〕グロスター機の下面。3車輪式着陸装置は、当時のイギリス機としては画期的なものであった。主車輪は油圧式で90度回転してうしろへ引込む珍らしいもの。下面は黄色。

〔下〕メッサーシュミットMe163B戦闘機。大戦の秘密兵器だったこのロケット戦闘機がそっくりそのまま保存されている。向うに見えるのはホーカー・ハリケーン戦闘機。





〔右〕Me163Bの機首。機首の小さなプロペラは発電用。胴体の下には橇に見えるドリーを付けて離陸し着陸には引込み式のソリを使った。



P〔左〕アブロ504K初歩練習機。1914年から20年までRAFで用いられたイギリスの代表的練習機。羽布張りで、ロータリー・エンジンを付け、翼下面は白、胴体は薄緑色。

〔下〕V1飛行爆弾。パルスジェットで推進し、大戦末期に英本土南部に向けて多量に発射した誘導弾の一種。機体は外板が切り欠かれて、内部構造がよくわかる。

